

研究主題 「授業力向上に向けた教員の相互研鑽による学習指導の工夫・改善」

I 研究の目的

学習指導要領における保健体育科の目標は、「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる。」である。特に「体育」の目標においては、生徒一人一人が運動の特性に触れて得られる運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、技能の向上を目指す過程で体力の向上や運動にかかわる社会的態度の育成、生涯を通じて継続的に運動ができるようになることが大切であるということを示している。

現在の高校生は体力の低下や運動をする生徒とそうでない生徒の二極化現象がみられる。加えて、集団の中にとけ込んで運動できない生徒や得意なスポーツにだけ興味を示す生徒、運動の不得意な生徒の気持ちを理解できない生徒などがいると言われている。このような多様な生徒に対して、学習指導要領の目標を実現するためには、教員の資質・能力のうち特に実際の授業の場面において具体的に発揮される授業力の向上が必要不可欠である。そのためにも目指す授業像を確立するとともに、教科指導を充実したものにする手段として、教員同士が学び合う相互研鑽の仕組みを作り、授業研究や校内研修等を一層充実したものにする必要がある。

平成16年9月、東京都公立学校の「授業力」向上に関する検討委員会報告書により、授業力の構成要素が示された。これは教員の授業力向上の指針となるものである。

本研究会では、この授業力の構成要素に基づき、保健体育科の教科としての特性を踏まえながら授業力の構成要素の具体化を図るとともに、教員の授業力向上に向けた望ましい相互研鑽の在り方について調査や検証授業等を通して課題を明らかにし、その課題解決のための具体的な方策等を研究開発することとした。

II 研究の方法

1 教科の特性を踏まえた授業力の構成要素

授業力の構成要素の「使命感、熱意、感性」「児童・生徒理解」「統率力」「指導技術（授業展開）」「教材解釈、教材開発」「指導と評価の計画の作成・改善」の6つの構成要素について、教科の特性や目指す授業像を踏まえた具体的な手だての例を開発し、実際の授業場面にあてはめて考察する。

2 日常的な相互研鑽の在り方

相互研鑽の方法や実施状況についてのアンケート調査等を行い、相互研鑽の必要性や実施上の問題点について検討し、授業力向上に生かせる相互研鑽の在り方について考察する。

3 相互研鑽を生かした検証授業

相互研鑽を生かした検証授業を実施し、学習指導の工夫・改善に効果的なものとなったかを検証する。今回は、単元をバレーボールとし、その専門性の高い教員からの助言を生かして指導計画を作成する。また、事前に検証授業の授業参観を同僚に依頼し、授業力の構成要素に基づいた「授業力向上に向けた相互研鑽シート」を作成して、検証授業についての授業評価を得る準備を整える。

さらに、授業前後や授業時の様子、学習ノートの内容、生徒の学習内容・活動等を評価規準に照らし、相互研鑽による学習指導の工夫・改善が行われ授業力が向上したかを考察する。

Ⅲ 研究の内容

1 目指す授業像と授業力の構成要素とその具体例

目指す授業像と授業力の構成要素と手だての具体例は、保健体育科としての教科の特性を文献より抜粋した「よい授業」の例を中心に検討して作成し、検証授業を実施するための柱とした。

保健体育科における「授業力」の構成要素と手だての具体例は、次ページのように示した。これを基本に授業力向上に向けた相互研鑽シートを作成し、検証授業に活用した。

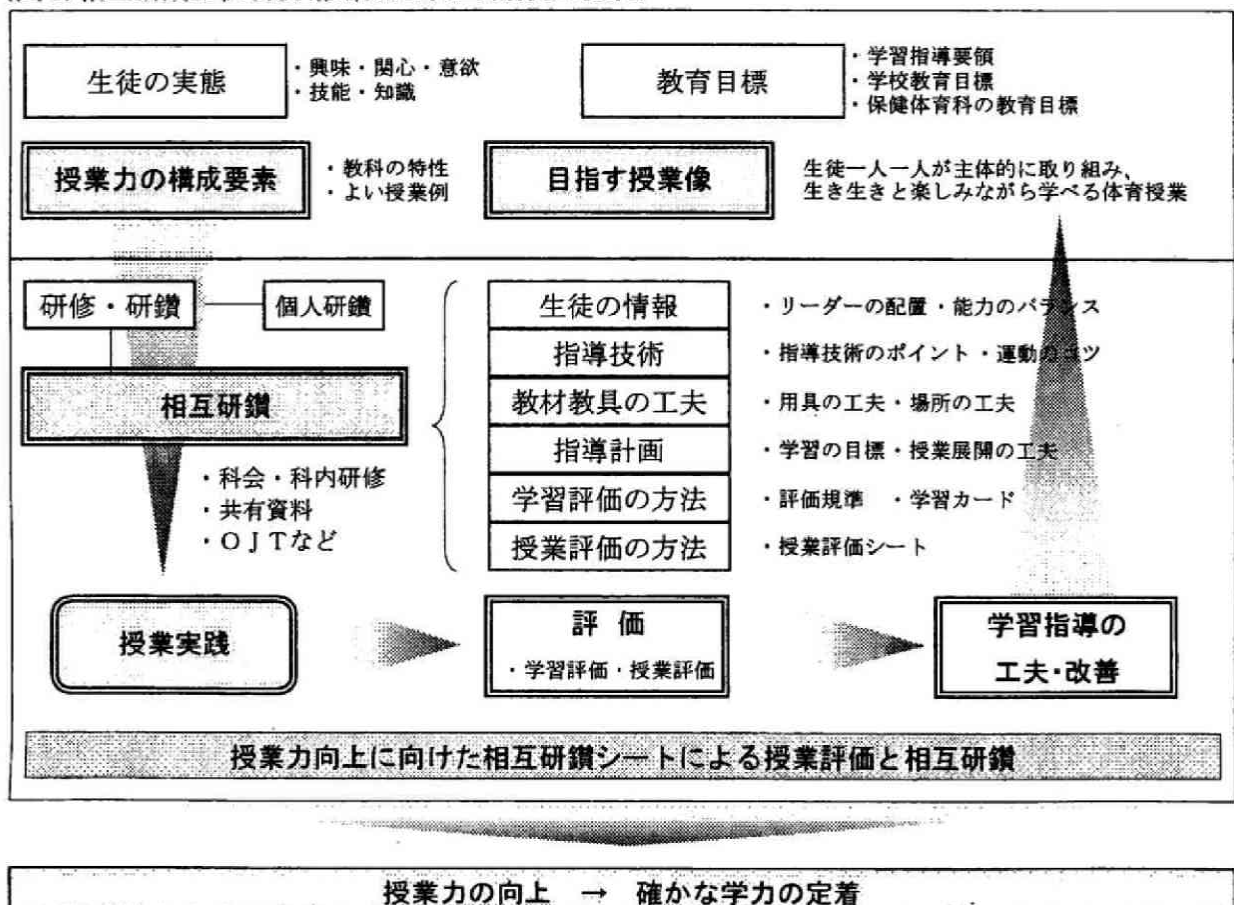
目指す授業像は、生徒一人一人が主体的に学習に取り組み、生き生きと楽しみながら学べる体育の授業を目指すとした。さらに授業の目的が効果的に達成されるために、次の事項を指導計画作成にあたり配慮すべき要素とした。

- (1) 技能の伸長：記録の仕方や評価方法を工夫し、技能の伸び（質的な深まり等）が認知しやすいようにする。
- (2) 達成感・喜び：到達目標や課題を個に応じた設定し、達成感や喜びが感じられるようにする。
- (3) 満足感：授業時間内に適切な運動量、運動時間を十分確保する。
- (4) スポーツへの興味：教材・教具を工夫し、スポーツの特性に触れ、楽しさを深く味わえるようにする。
- (5) 健康・安全の理解：身体運動の科学的理解とルール遵守の重要性や危険予測について理解できるようにする。
- (6) 人間関係の構築：友人と協力し合いながら、賞賛や励まし、喜びの共有等がみられるよう学習形態を工夫する。

2 日常的な相互研鑽の在り方の検討

教員の研修や研鑽については、機会や頻度、方法、内容などについて調査した。その結果、研修会への参加は、授業があるために都合がつかないこと、生徒への対応のために参加できない等の実態がわかった。一方で、日常的に同僚の教員同士が情報交換をしたり、授業について話をしたりすることが授業を行う上では大きな力となっていることがわかった。そこで日常的に行うことのできる相互研鑽の在り方について検討し、検証授業で検証することとした。

(図1)相互研鑽の在り方と授業力の向上(研究の流れ)



保健体育科における「授業力」の構成要素とその手だての具体例

「授業力」の構成要素		保健体育科における構成要素の具体例	相互研鑽のための視点と手だての具体例	
			科目「体育」	科目「保健」
使命感 熱意 感性	豊かな感性を身に付け、教員の職責を自覚し、困難な状況・課題に挑む姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・保健体育のねらいや内容を生徒に生涯を通じて実践できるよう、生徒の関心・意欲を十分に引き出し、できる・わかる授業の構築を常に心がける。 ・意欲的に研修や研究に取り組むとともに、他の教員から教え方や新たな知識を学んでいる。 ・生徒の健康状況を把握し、適切な言葉かけや表情・行動等により、生徒の学習への興味・関心を高めていこうとする姿勢を常にもっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できる授業、わかる授業を実践するための教材研究を意欲的に行っている。また、科内で教材開発を計画的に行う。 ・研修会への積極的に参加することを心がけている。また、研修会の内容を科内や校内で共有する。 ・互いの授業を相互に参観し、授業改善についての手だてを科内や校内で検討する。 ・安全面を常に意識し施設、用具などの環境整備の点検を科内で計画的に実施する。 ・生徒の健康状態を把握するとともに、不測の事態への対応も迅速に対応できる。 	
児童・生徒理解	一人一人の児童・生徒を大切にしようとする愛情	<ul style="list-style-type: none"> ・技能差や興味・関心に差の出やすい保健体育の授業においては、生徒の心情を理解しつつ、その授業全体の雰囲気より良いものにするために、生徒へ積極的にかわろうとすることが大切である。 ・集団の特性をとらえつつも、一人一人の生徒を大切にすることをもち、個別の問題に関心を抱き、生徒にかかわる姿勢をもっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の意見や質問、考え方、経験等を受容し誠実に対応している。 ・生徒のつまづきをとらえ、適宜に個別指導することができる。 ・保健授業において養護教諭や学校医等と連携の仕方について検討する。 ・担任教諭や養護教諭等から生徒情報について双方向で互いに連絡をとり、生徒の状況について把握することを心がけている。 	
統率力	児童・生徒の集団をまとめ、リードする力。児童・生徒を惹き付ける力	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒との相互信頼関係と授業規律なくしては統率力は生まれない。そのためにも、日々の授業を通して、人間的魅力を高めている。 ・運動技能や知識の点で生徒を惹き付けるものや個人差のある生徒を適切に指導しつつ、集団の特性をとらえての適切な指示や援助を行っている。 ・生徒相互の学び合い（自主性・自発性）を引き出す手だての工夫などを日々追求し意識を高めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒に授業のねらいを明確に伝えることを科として検討し実践する。 ・生徒の実態を考えた明確な授業のルールを科として検討し設定する。 ・言葉・行動などにあられる人間的魅力を高めるよう常に心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒を惹き付けるための幅広い実技能力と練習法の実践と蓄積を行う。 ・グループ学習におけるリーダーの育成方法を検討する。
指導技術 (授業展開)	「わかる授業」「もっと学習したくなる授業」を実現する技能	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎基本を定着させ、生徒が主体的に課題を解決していける力を身に付けさせる方法について常に研鑽を心がけ、実践・体得していくために、教材研究や各種研究会における自己研修や校内研修、教員の相互研鑽を活用して高めている。 ・学習内容が生徒にとって適切なものであり、生徒が到達可能な理解できるレベルに導けるよう研鑽している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門性の高い教員から運動のコツを学び、指導技術を高める。 ・教員の技能獲得過程における練習法を整理する。 ・多様な生徒へ対応する指導技術の共有化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒を惹き付けるための幅広い保健教養のある授業実践と蓄積を行う。 ・生徒同士の学び合いを引き出す参加型の授業を検討する。
教材解釈 教材開発	教科や関連する学問等に関する深い識見	<ul style="list-style-type: none"> ・体育における種目の特性、保健における内容の重点化に応じた教材は必ず存在する。生徒の能力やレディネスに応じた教材の開発を常に意識している。 ・保健体育という教科は何を教える教科なのかについて、研鑽を通して学習内容の質的な高まりの整理をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動種目の特性に触れることのできる学習内容を学年ごとに整理する。 ・科学的視点や多様なバリエーションによるアプローチを検討する。 ・男女共習による技能差等を踏まえた練習方法を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教えずぎに陥らないよう必要な学習内容を整理する。 ・身近な例から真理を追究し、実践力に導く指導方法を検討する。 ・生徒に身に付けさせる内容を明確にした授業実践を検討する。
「指導と評価の計画」の作成・改善	常により授業を求めていく、改善の意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの運動種目や単元の「指導と評価の計画」を作成し、常に改善を図っている。 ・作成する上で最も大切なことは、その授業における「生徒の姿」を想定した「評価規準」を作成することである。それにより「指導と評価の一体」が図られ、よりよい授業改善を図ることが可能となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保健体育科における「目指す生徒像」等を検討する。 ・努力を要する生徒への手だてを検討する。 ・生徒による授業評価を活用した授業改善について検討する。 ・科における「指導と評価の計画」立案と評価・改善計画の検討をする。 ・年間授業計画や週ごとの指導計画の改善等を検討する。 	

3 検証授業に向けての相互研鑽

(1) 授業者の実態把握

相互研鑽の成果が授業に反映し、学習指導の工夫・改善に結び付いたかを検証するために、まず、5月に授業を担当する教員の授業の実態把握を行った。ここでは、第二学年女子を対象にしたソフトボールの授業が行われ、生徒の授業に対する興味、関心の度合いや取り組む姿勢等といった生徒の実態把握と授業内容や方法についての課題等について検討した。

その結果、各委員から授業について活発な意見交換が行われ、生徒の学習状況等について共通理解をすることができた。しかし、目指す授業像等については、多様な授業観から様々な意見が出た。授業はどうあるべきかということについて共通の視点が必要であることから、授業力の構成要素を保健体育科としての特性や目指す授業像を踏まえて明確にすること、さらに、相互研鑽の在り方についても検討した。

(2) 検証授業に向けての相互研鑽

検証授業は、第二学年女子のバレーボールの授業とした。相互研鑽については、授業力の構成要素の指導技術（授業展開）に着目した。

検証授業に向けた授業からみえた課題とその課題を解決するための指導技術（授業展開）はどうあるべきか、バレーボールを専門とする教員から実技指導を含め相互研鑽を行った。

授業者からの課題	課題解決の指導技術（授業展開）
<ul style="list-style-type: none"> ・男子と女子ではバレーボールの運動特性の受け止め方に違いがあり、スパイクについて女子では楽しさを味わいにくいのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・セッターに近い位置で行うAクイックは、ボールをヒットしやすい。ネットの高さを低くし、ボールをミートしたり、ドライブ回転をかけたりする練習が効果的である。
<ul style="list-style-type: none"> ・スパイクにつなげるための基本的なパスの習得が難しいのではないか。また、技能の習熟に個人差が大きいのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンダーハンドパスの運動のコツとしては、ボールに緩い逆回転をかけることである。そうすることで正しい動きを身に付けさせることができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・限られた学習環境では、運動の質と量を十分に確保することが難しいのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットを3分割するようにアンテナを立てて、コートをも3等分にして6チームをコートに入れラリー練習をするとよい。
<ul style="list-style-type: none"> ・集団スポーツとして、チーム内でお互いに声を掛け合い、コミュニケーションを高めていくことがゲームの勝敗を左右するのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとに移動をしながらパス練習をしたり、負荷をかけて声を掛け合うことが必要な状況を意図的に作り出すとよい。



(都立大学附属高等学校での相互研鑽 平成 17 年 8 月 29 日実施)

4 検証授業の単元における指導と評価の計画

教科	保健体育	科目	体育
単元	球技：バレーボール		
運動の特性	(1) ネット型の球技であるバレーボールでは、相手にプレーを邪魔されないが、瞬間的にしかボールに接触できないため、ボールの扱い方（特に基本となるパス）とともに、ボールに触れない間のプレー（ポジションニング）が大きな意味をもつ。 (2) ミスが直接ポイントとなるバレーボールでは、「守りからの攻撃」への連携を生かしたゲームが中心となる。相手のミス誘ったり、相手のいない場所にボールを落したりすることがゲームを楽しくする要素となる。 (3) バレーボールでは、「ラリーを続けること」から攻撃によって「ラリーを意図的に中断させること」で楽しさが発展していく。バレーボールの技能としてのスパイクを積極的に行う意識をもたせることでゲームの質が高まる。		
単元の目標	(1) バレーボールに興味をもち、自分やチームの能力に応じて、個人的技能や集団的スキルを高め、作戦を生かした攻防を展開してゲームができるようにする。 (2) チームにおける自己の役割を自覚し、その責任を果たし、互いに協力して練習やゲームができるようにするとともに、勝敗に対して公正な態度がとれるようにする。また、練習場などの安全を確かめ、健康・安全に留意して練習やゲームができるようにする。 (3) チームの課題や自己の能力に応じた課題の解決を目指して、計画的な練習の仕方やゲームの仕方を工夫することができるようにする。また、競技会の企画や運営ができるようにする。		

バレーボールの評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
ゲームの構造的な特性から「ネット型」に類型化されるバレーボールの特性に関心をもち、球技（主に集団的スキルを用いて行うネット型の球技）の楽しさや喜びを味わえるようチームにおける自己の役割を自覚して、その責任を果たし、互いに協力して進んで練習やゲームに取り組もうとするとともに、勝敗に対して公正な態度をとろうとする。また、練習場などの安全に留意して練習やゲームをしようとする。	チームや自分の能力に応じた課題を設定し、その解決を目指して練習の仕方やゲームの仕方を工夫している。	チームの課題や自分の能力に応じて、バレーボールの特性に応じた技能（個人的技能・集団的スキル）を身に付け、作戦を生かした攻防を展開してゲームができる。	バレーボールの特性に応じた技術の構造やスキルを高めるための効果的な練習の仕方、ルール、審判法及び競技会の企画や運営の仕方を理解し、知識を身に付けている。

単元における指導と評価の計画（10時間）

ねらい・学習内容	学習活動	教師の指導	学習活動における具体的な評価規準	評価方法等
学習Ⅰ（1時間） ○オリエンテーション ・単元における学習の目標を知る。 ・単元目標に必要なバレーボールの特性を理解する。 ・毎時の学習ノートの記入の仕方を確認する。 ○課題発見ゲーム（ねらい1）の実施 ・チームや自分の課題の発見と単元における目標を設定する。 ○生徒による授業評価（診断的）の意味を知る。	○学習に対する見通しをもち、（歴史的背景を踏まえた）バレーボールのねらい及び特性を知る。 ○準備運動・ほぐしの運動を行う。 ○パスの基本練習を行う。 ・キャッチボール ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス ○タスクゲーム（パス）を行う。 ○チーム分けをし、チーム名を決める。 ○学習ノートの記入・活用方法を理解する。 ○これまでの体育授業を振り返り、診断的（事前的）評価を行う。	・バレーボールの特性を説明する。 ・けが防止のための準備運動やほぐし運動を十分に行うよう指示する。 ・チーム分けの留意点を説明する。 ・学習ノートの意義と活用方法を説明する。 ・タスクゲームの（具体的な）課題（目標）を設定し、指示する。	・バレーボールはネットをはさみ攻防を楽しむ特性があるということについて、言ったり、書き出したりしている（知識・理解①）。 ・練習やゲームの場所の安全を確かめ、危険なプレーをしないなど、健康・安全に留意しようとする（関心・意欲・態度①）。 ・練習やゲームから、チームや自分の課題を見付けている（思考・判断①）。 ・パス（とレシーブ）で、ボールをコントロールすることができる（運動の技能①）。	学習ノート 観察
学習Ⅱ（2～6時間） ○個人的技能と集団的スキルを高めながらゲームを行う。	○チームごと健康・安全の確認を行い、準備運動・ほぐしの運動を行う。	・体育授業における約束事を徹底する。	・バレーボールの集団的スキルに着目して、作戦を立てて勝敗を競い合うバレーボール	

<p>(ねらい2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パスゲーム ・サーブゲーム ・簡易ゲーム <p>○ゲーム分析・評価</p> <p>○集団的技能の学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(実際のゲーム状況をイメージし、) トス～スパイク、サーブカット～トス～スパイクなどを行う。 <p>○学習ノートを活用し形成的に自己評価を実施する。</p>	<p>○タスクゲーム (パス・サーブ) について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バウンド数、タッチ数、人数の制限、得点方法など <p>○簡易ゲームにおいてゲーム分析を行い、具体的な作戦の立案を行う。</p> <p>○集団的技能の練習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トス～スパイク ・サーブカット～トス～スパイク ・ブロック～レシーブ～トス～スパイク 	<p>・タスクゲームの(具体的な)課題(目標)を設定し、指示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際のゲーム状況と個々の練習をつなげられるよう、ゲーム中に頻出するプレーを抽出して練習するよう指導する。 ・コーチング(声かけ)の重要性を理解させる。 	<p>の楽しさを味わおうとする(関心・意欲・態度②)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習やゲームで、自分の役割を果たし、協力して教え合ったり、励まし合ったりしようとする(関心・意欲・態度③)。 ・チームや自分の課題をとらえ、練習の見直しやゲームで新たな作戦を見付けている(思考・判断②)。 ・サーブでコースをねらい、相手コートに入れることができる(運動の技能②)。 ・スパイクやブロックの動作ができる(運動の技能③)。 ・バレーボールの技能を高める合理的な練習法について、具体例を挙げている(知識・理解②)。 ・バレーボールに必要な集団的な技術について、言ったり書き出したりしている(知識・理解③)。 	<p>観察 学習ノート</p>
<p>学習Ⅲ(7～10時間)</p> <p>○自チーム及び相手チームに応じた集団的技能を高めながらゲームを行う。(ねらい3)</p> <p>○集団的技能練習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・守備フォーメーション(サーブカット、ブロック) ・攻撃フォーメーション(スパイク) <p>○ゲーム評価とそれを生かした作戦立案</p> <p>○審判法を理解する。</p> <p>○リーグ戦とトーナメント戦を行う。</p> <p>○生徒による授業評価(総括的)を実施する。</p>	<p>○集団的技能の練習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・守備フォーメーション(サーブカット、ブロック) ・攻撃フォーメーション(スパイク) <p>○集団的技能を生かしたゲームを行う。</p> <p>○ゲーム時にはゲーム分析を行い、ゲームを評価し、次ゲームに向けての作戦立案を行う。</p> <p>○ボールイン、アウト、ヘルドボール(ボールテンディング)、ダブルコンタクト、ペネトレーションフォルト(オーバーネット、パッシングザセンターライン)、フォアヒット(オーバータイムス)、タッチネット、などの基本的なルールを理解し、審判を行う。</p> <p>○自チームの得点やよいプレーに対して、お互いにほめ合い、励まし合う。</p>	<p>・サーブやスパイクに対するフォーメーションの意義と方法を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フォーメーション練習では、各自のポジションを決め、その責任範囲を確認しながら練習するよう指示する。 ・チームプレーを楽しめるよう、またワンプレーでも多くラリーが続くように、カバー(リカバリー)について指導する。 ・基本的ルールと審判動作について説明する。 	<p>・審判の判定や指示に従い、勝敗の結果を受け入れようとする(関心・意欲・態度④)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技能の段階に応じて、組織的な攻守に必要な練習法や作戦を提示されたものの中から選んでいる(思考・判断③)。 ・練習やゲームで、直上トス、オープントスを使ったスパイクによる攻撃のフォーメーションの動きができる(運動の技能④)。 ・練習やゲームで、相手のサーブやスパイクに合わせた守備のフォーメーションの動きができる(運動の技能⑤)。 ・ラリーポイント制、タッチネット、ローテーションなどの基本的なルールについて、言ったり書き出したりしている(知識・理解④)。 ・ゲームの運営の仕方について、具体例を挙げている(知識・理解⑤)。 	<p>観察 学習ノート 評価シート</p>

5 検証授業の学習指導案

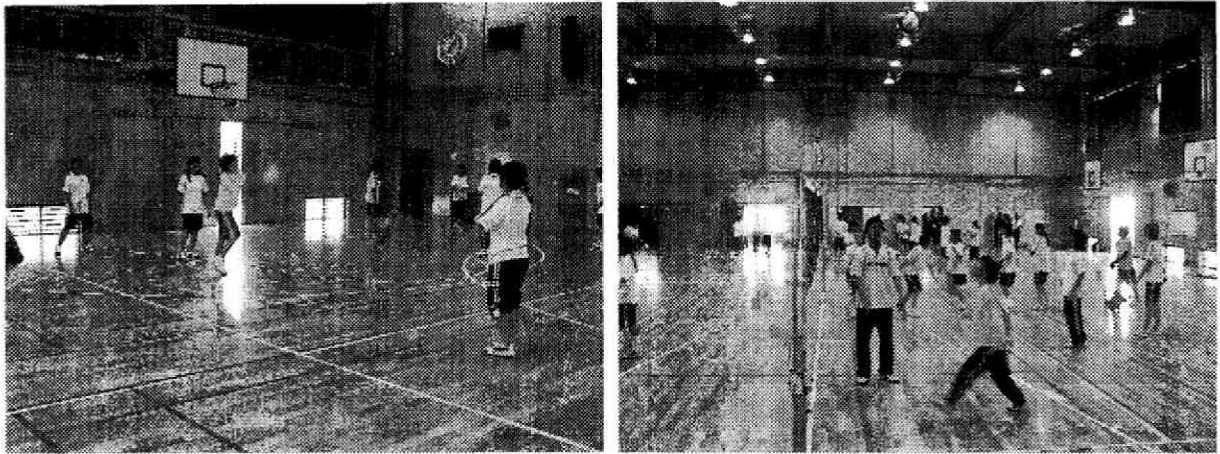
本時の位置	10 時間中の 6 時間目	対象	全日制普通科 第 2 学年 女子 4 2 名	
本時の目標	自分の役割を果たし、協力して教え合ったり、励まし合う中で、チームとしての意識を高め合いながら練習やゲームができる。三段攻撃をイメージしながら「守りからの攻撃」について学習することでバレーボールの特性に触れることができる。			
ねらい・学習内容	学習活動	教師の指導	学習活動における具体的な評価規準	評価方法等
【導入】 本時の学習目標・内容の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごと集合し、服装など安全確認をして、準備運動、補強運動を行う。 ・前時の学習を参考に、チームの課題に応じて練習を行うことを確認する。 また、その後チーム内でタスクゲームを行うことを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャプテンに行動の迅速化を促す。 ・前時から学習の流れを把握させながら、本時の学習内容を示す。 		
【展開 1】 <ul style="list-style-type: none"> ・チームの課題は何かを考え、その課題解決のための練習は何かよいか決定し、実践する。 ・チームで共通理解をもって練習する。 ・チームで教え合い、助け合いの雰囲気を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム練習の場を確保する。(1 コートを縦に 3 等分にする。アンテナが目印) ・チームの課題を確認し、配布した学習資料から選択するなどし、チーム練習の内容を決める。チームの課題に向かって仲間とともに進んで練習に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム練習の場に重なりがないか、また、教え合い・助け合いがあるか観察し、声かけを積極的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・技能の段階に応じて、組織的な攻守に必要な練習法や作戦を提示されたものなかから選んでいる(思考・判断③)。 	観察 学習ノート
【展開 2】 <ul style="list-style-type: none"> ・自チーム及び相手チームに応じた集団的技能を高めながらタスクゲームを行う。(ねらい 3) ・タスクゲームのルールは、1 チーム 3(4) 人、1 コートを縦に 3 等分にして使用する。 ・サーブは投げ入れ、タッチ数は自由、得点方法はスパイクによるものは 2 点、その他は 1 点とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三段攻撃の仕上げである「スパイク」による攻撃を行うためのタスクゲームであることを理解し、チームで協力してゲームを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「スパイク」による攻撃を行うためのゲームであることを強調する。ルールの解釈で問題が生じないように指導する。 ・個々のプレーに対して声をかけ、技術的な助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・練習やゲームで、直上トス、オーブントスを使ったスパイクによる攻撃のフォーメーションの動きができる(運動の技能④)。 	観察 学習ノート
【まとめ】 学習ノートへ本時の反省と次時の課題をまとめる。	本時の目標・内容とチームの学習活動を振り返る。	本時のポイント(目標・内容及び新たな気付き)を述べ、次時の予定を提示する。		
【まとめ】 スパイクの場面が多く見られたか。見られた場合と見られなかった場合に何が違ったのか。トスはどうか。2 打目のパス(トス)がオーバーハンドパスだった場合、スパイクによる攻撃はどの程度あったのか。チーム練習とゲームにつながりは見られたか。 【次 時】 今以上にチーム練習を工夫する。コートを広くとって 6 人でゲームを楽しむ。その際、フォーメーションを考える。そして、守備から攻撃への移行について学習を深める。				

授業力向上に向けた相互研鑽シート（記述は検証授業におけるもの）

構成要素	授業等における具体的な取組について	授業者の自己点検
使命感 熱意 感性	<p>豊かな感性を身に付け、教員の職責を自覚し、困難な状況・課題に挑む姿勢 （例えば、先生はにこやかで明るい雰囲気や授業を行おうとする、生徒の学習状況や心情などへの配慮、事前の準備などについて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習カードが有効に活用されている。特に場の設定と雰囲気づくりがうまい。 ・丁寧な言葉使いで生徒を尊重している。生徒が安心して教員の指導を受け入れている雰囲気がある。 ・教員は生徒と多くかかわろうと努力している様子が見える。また、生徒と感動を共有しようとしている様子が見える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習カードを使用し、授業のねらいや評価について生徒に意識させることができた。 ・レシーブに参加したり、できばえを声かけしたりして生徒の活動を盛り上げるようにした。
児童・生徒理解	<p>一人一人の児童・生徒を大事にしようとする愛情。児童・生徒を惹きつける力 （例えば、先生は積極的に巡視し、個々の生徒たちに頻りに助言を与えるなど学習状況の把握、肯定的なかかわりや個に応じた適切な指導などについて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うまくできない生徒が多いうるグループや個への具体的な技能向上のためのアドバイスがほしい。 ・各コートで半分ずつ集めて指導する場面があった方がよい。 ・教員がどこに位置するのかを考慮することが大切である。スパイク練習の時は、トスを上げる側にいた方がよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・良い活動をしているグループの長所を認め、それを他グループにも広げる工夫をしたが、もっと的確なアドバイスを心がけたい。 ・次時の指導の場面では、どこの位置に立つかを工夫する。
統率力	<p>児童・生徒の集団をまとめ、リードする力。学習への関心・意欲を引き出す力 （例えば、生徒が生き生きと楽しそうに学習するなど互いに認め合う学習集団の構築、教師と生徒の信頼関係の確立などについて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつなど授業を進める上での規律が守られている。安全確保のためにボールを取りに行く時も生徒がよく動いている。 ・各グループの目標がある。生徒同士の学び合いがあり、授業の中でうまくなっていく様子を見ることができた。 ・「1・2・3スパイク」等の良い声だしを全体に広げるために、もっと良い部分を積極的にほめることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒との信頼関係の中で、身だしなみなど注意しなくても良くなってきた。 ・自分が考えていた以上に生徒は動いてくれた。
指導技術 （授業展開）	<p>「わかる授業」「もっと学習したくなる授業」を実現する技能 （例えば、生徒の主体的な学習活動を引き出す説明など学習の目標や課題の意識化、効果的な説明、活動などの時間の確保、学習状況に応じた柔軟な対応などについて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スパイク練習時のトスに対するアドバイスが不足している。タスクゲーム終了時の各グループでの反省が必要である。 ・「トスをオーバーで上げさせたい」という教師のねらいを生徒に気付かせようとしている。 ・タスクゲームでスパイクを増やすための工夫が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次時に向けてもどの様にしたら良いスパイクが打てるのか。そのためにトスをどの様に上げるのかをグループで考えさせる。 ・事前にグループリーダーに練習のポイントを助言し明確にさせる。
教材解釈 教材開発	<p>教科や関連する学問等に関する深い識見 （例えば、学習課題や教材は生徒の能力に合ったもので、大きな失敗や困難さが少ないなど専門的知識に裏付けされた理解しやすい運動内容や教材の活用などについて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネットの高さ（2m15cm）は適切かどうか。ミニゲームの練習での3つのエリアは適切であった。 ・コート後ろや真中が空いてもったいないので、場の使い方に工夫がほしい。 ・ボールがネットの下を転がらない工夫、ネット際でのジャンプやボールに対する恐怖心を取り除く工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相互研鑽で学んだアンテナ利用の3か所グループ練習を取り入れ、運動量を確保できた。 ・授業の中では、生徒の練習する場面の工夫が重要であると再認識した。
「指導と評価の計画」の作成・改善	<p>常によい授業を求めていく、改善の意欲 （例えば、目標及び評価規準の設定、生徒の実態に応じた指導計画や学習指導案の作成などについて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何時間目までにどこまで身に付けさせたいのか、生徒に具体的な目標を示すことが必要である。 ・生徒がどう変わったのかを記録していく、例えばファイルにして蓄積していくことが考えられる。 ・指導計画を立てる際に発展的な課題も含めた練習を取り入れると、生徒がより一層見通しをもって取り組める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1、3年のバレーボール担当者とは単元計画について話し合い、学年の目標を決められたことができた。 ・学習カードを見ながら、生徒が見通しがもてるよう工夫するようになる。

6 検証授業の成果等と相互研鑽の在り方

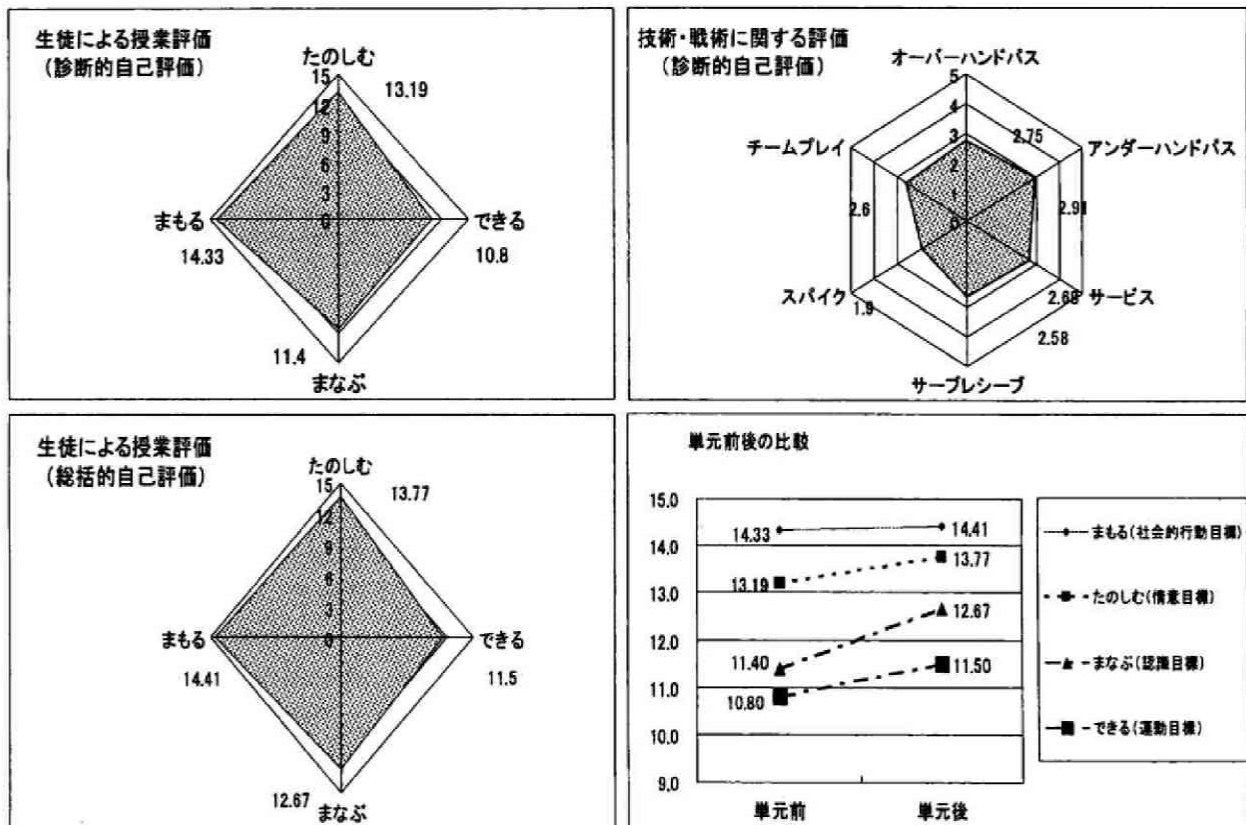
(1) 検証授業の様子



(都立江北高等学校での検証授業 平成17年9月29日実施)

(2) 単元の前後における生徒の変容

生徒による授業評価を活用して、単元の前に診断的な自己評価、単元後に総括的な自己評価を実施し客観的に生徒の変容の様子を比較したところ次のグラフのとおり変容が見られた。



(3) 検証授業の成果

検証授業を行い、次の成果があった。

- ア 相互研鑽により、具体的な指導技術(指導展開)を積極的に授業に取り込むことができ、生徒の目的意識が高まり学習活動が活発になった。また、授業者も実技を伴う相互研鑽をしたことで、運動のコツや指導のポイント等に自信をもって生徒を指導することができた。
- イ 学習の場の工夫としてアンテナを利用しコートをも3分割したことにより、より多くの生徒が一度に学習に取り組む運動時間を確保することができた。また、生徒の学習活動に意識的にスパイクを打つという姿も見られるなど質的な高まりや楽しさをより深く味わう様子が見られた。

ウ 様々な指導技術を提示した教員も含め相互研鑽にかかわった教員は、助言した内容が授業実践で生かされていたことに成就感を得ることができた。

エ 授業力向上に向けた相互研鑽シートを活用したことにより、共通の視点で授業を観ることができ、検証授業後の意見交換も視点を定めた具体的な学習指導の工夫・改善等について検討することができた。

(4) 検証授業の成果を支えたもの

検証授業の成果を支えたものとしては、次のことがあげられる。

ア 生徒は、体育の授業に対する関心や意欲が高く、教員が授業規律を指導をする場面がほとんどなく、授業に取り組む姿勢・態度ができていた。このことにより、生徒が運動する実質的な時間を十分確保することができた。授業者が継続的に指導を重ねてきたことによるところであり、体育の授業を作る上で重要な要素の一つである。

イ 授業者は、「使命感、熱意、感性」や「児童・生徒理解」の項目においてよく指導できているという意見が多かった。一方でバレーボールの授業の指導には不安をもっていた。授業者は、自校において3年間を見通した目標を設定し、指導計画をどう立てていくか、教科の先輩教員と意見交換や相談を積極的に行った。また、「指導技術（授業展開）」については、他教員がこれまでに会得している運動のコツや練習計画及び生徒へのわかりやすい説明の仕方等を相互研鑽し合うことができた。

(5) 相互研鑽の在り方

日常的な相互研鑽を実施するためには、安心して相互研鑽が行うことができる教員同士の信頼関係が大切である。また、目指す授業像を教科として検討するとともに、授業力の構成要素を踏まえた「授業力向上に向けた相互研鑽シート」などを活用して、各学校において共通の視点をもって相互研鑽をすることが大切である。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 保健体育科の特性を踏まえた授業力の構成要素と相互研鑽のための視点と手だての具体例を示すことができた。
- (2) 授業を実施する運動種目についての相互研鑽を行い、具体的な指導技術（授業展開）を学び、授業者が自信をもって生徒に指導を行う等、積極的に授業に取り込んだことは、授業力の向上に効果的であった。
- (3) 授業力の構成要素に基づいた「授業力向上に向けた相互研鑽シート」を活用し相互研鑽することにより、授業参観の視点が明確になり、学習指導の工夫・改善に具体的な課題として役立つことができた。また、授業力向上に向けた日常的な相互研鑽の在り方を示すことができた。

2 今後の課題

- (1) 各学校における相互研鑽する時間を確保するために、教科会を授業時間割の中に組み込み定例化させ、授業力向上に向けた相互研鑽シートなどを活用した授業研究を計画的に実施するための効果的な方法等についてさらに検討していく必要がある。
- (2) 指導と評価の一体化を一層充実させるためにも、各学校において各運動種目の指導と評価の計画を作成するとともに、生徒が学習すべき内容（運動の技能、学び方、態度）を学年ごとに整理する必要がある。
- (3) 授業力向上に向けた授業研究等についての実践的な研究を、来年度より開設される「東京教師道場」において継続的に研究していく必要がある。